

[参考]

2022.9.10

「稲作の起源」と「日本語の起源」

清水徹朗

1. 日本の食料・文化における米・稲作の重要性

- ・米生産量756万t、作付面積140万ha(農地の32%)
生産戸数71万経営体 (全体の74%)
- ・米は日本の穀物生産量の88%、自給カロリーの34%を占める
- ・世界の三大穀物……米(7.4億トン)、小麦(7.5億トン)、トウモロコシ(10.6億トン)
- ・穀物生産量(28.5億トン)のうち米が26%、三大穀物で90%を占める
- ・米の生産量は過去50年間で2.6倍、アジアが90%を占める
- ・米は日本人の生命・生活を支えてきた……坪井洋文『稲を選んだ日本人』(1982)
- ・**日本人にとって米は特別の存在**……租税、貨幣、祭、宗教(神道)、地名、人名
「豊葦原水穂国」(『古事記』)、「豊葦原瑞穂国」(『日本書紀』神代下)
「農は天下の大きなる本なり。民の恃みて生くる所なり。」(『日本書紀』崇神紀)
←「イモと日本人」(坪井洋文)、「ハタケと日本人」(木村茂光)、「非農業民」(網野善彦)
- ・米篇の漢字……粗、精、粉、粒、料、粹、粘、粕、糠、粃、糖、粧、糊

2. 「稲の日本史」と照葉樹林文化論

- ・**稲作史研究会**(1952～62)……23回の研究会 → 『稲の日本史』(全5巻)
……安藤広太郎、柳田国男、盛永俊太郎、東畑精一、石黒忠篤等
- ・安藤広太郎『日本古代稲作史雑考』(1951)
……安藤広太郎(1871－1958)は農林省農事試験場長、九大・東大教授(作物学)
- ・江上波夫「騎馬民族征服王朝説」(1948)……日本国は騎馬民族による征服国家
- ・柳田国男「海上の道」(1952)……黒潮による南方からの文化的影響を主張
- ・1958～59 東南アジア稲作民族文化総合調査
- ・中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』(1966)……照葉樹林文化を提唱
- ・今西錦司『人間社会の形成』(1966)……人類学的歴史理論
- ・梅棹忠夫『文明の生態史観』(1967)
- ・上山春平編『照葉樹林文化』(1969)……和辻哲郎、柳田国男、江上波夫を批判
「ヨーロッパ中心的な偏向をもつマルクスの歴史観を批判的に克服する」(上山春平)
- ・上山春平・佐々木高明・中尾佐助『続・照葉樹林文化』(1976)
- ・渡部忠世『稲の道』(1977)……**稲作のアッサム・雲南起源説**
- ・佐々木高明『照葉樹林文化の道』(1982)
- ・渡部忠世編『稲のアジア史』(全3巻)(1987)

[照葉樹林文化論]

- ・「照葉樹」とは葉の表面に光沢が見られる常緑広葉樹(カシ、シイ、クスノキ、ツバキ等)。
- ・照葉樹が多く存在するヒマラヤ南麓から東南アジア北部、中国南部、西日本に共通に見られる農業、食文化、祭等に着目し、日本文化の基層や稲作の起源が論じられた。
- ・焼畑農業、モチ米、納豆、絹、漆、根菜類の水さらし利用等。





雲南省 元陽



中国の少数民族

[落葉広葉樹](東日本)……ブナ、クヌギ、ナラ、クリ
縄文文化の中心は東日本……「ブナ帯文化」(市川健夫、齊藤功)、
「ナラ林文化」(佐々木高明)、「縄文文明」(安田喜憲)



3. 人類の歴史と農耕・稲作の始まり

- ・人類は400～200万年前にアフリカで誕生したとされる・・・アウストラロピテクス(猿人)
- ・現在の人類の祖先であるホモサピエンスは約20万年前に東アフリカで生まれた
→ アフリカから世界各地に広がっていった



- ・日本に人類が住み始めたのは約4万年前と考えられている(旧石器時代)
- ・人類が農耕を開始したのは約1万年前……チグリス・ユーフラテス川流域
← 東南アジア起源説、複数同時発生説など諸説。農耕開始時期も未確定。
- ・石器、農具、火の使用、焼畑

中尾佐助『栽培作物と農耕の起源』(1966)

- ①根菜農耕文化……熱帯アジア(バナナ、イモ、サトウキビ)、焼畑
- ②照葉樹林文化……東南アジア北部、中国南部、西日本(クズ、ワラビ、ミカン、茶)
- ③サバンナ農耕文化……西アフリカ、インド(雑穀、マメ、ゴマ)→ 周辺で稲作を開始
- ④地中海農耕文化……中東(小麦、大麦、ナタネ、ダイコン)、家畜の利用
- ⑤新大陸農耕文化……中南米(ジャガイモ、トウモロコシ、キャッサバ)

[稲作の起源]

- ・インド説……多様な品種
- ・アッサム雲南説(渡部忠世、中川原捷洋)……野生種、遺伝的多様性
- ・長江下流域での稲作遺跡発見(河姆渡遺跡)

4. 縄文農耕論と稲作の渡来

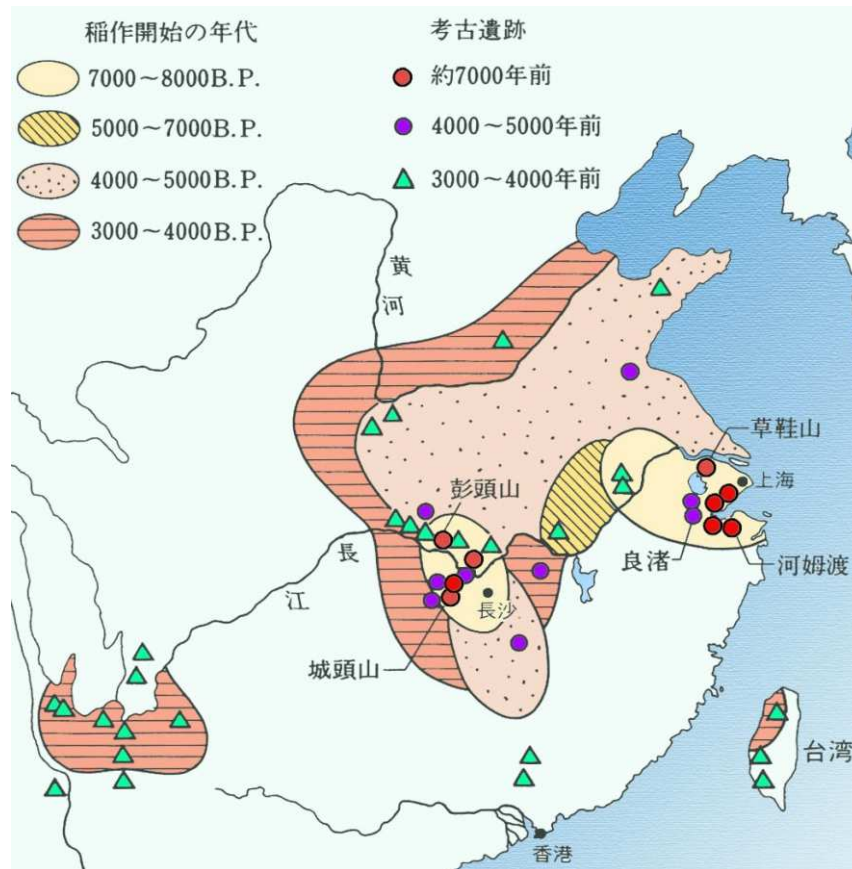
- ・縄文時代(1万5千年前～紀元前4世紀)
 - ……磨製石器、縄文式土器、定住集落
- ・弥生時代(紀元前3世紀～3世紀)
 - ……弥生式土器、稲作、環濠集落、青銅器・鉄器
- ・「旧石器」の発見……岩宿遺跡(相沢忠洋)
- ・縄文時代は「狩猟・採集・漁労」を行っていた
- ・縄文時代に農耕を行っていたか否かについて論争が行われてきた。
- ・**縄文農耕論**(藤森栄一)の主張
 - ①狩猟生活の割には鏃の数が少ない
 - ②石斧を農耕用に使っていた痕跡がある
 - ③石臼・石皿で木の実、雑穀を粉にしていた
 - ④焼畑を行っていた痕跡がある
 - ⑤集落の規模が大きく狩猟・採集のみでは食料確保が困難
- ・佐々木高明『稲作以前』(1971)……焼畑による農耕(雑穀、豆類、イモ)

・稲作の渡来ルート ← 日本には稲の野生種がない

①北方説……華中・山東半島・朝鮮半島を經由して渡来

②南方説……華南地域から台湾、沖縄を經由して渡来

③直接渡來說……長江下流域から東海(東シナ海)を渡って直接渡来



安藤広太郎『日本古代稲作史雑考』

- ① 稲の原産地……インド、南シナ、インドシナにおいて独立して稲作を開始
- ② 日本への稲作の渡来……江南地方で稲作を営み米を常食としていた南方民族が北九州と南鮮に移入し稲作(ジャポニカ)を伝えた
- ③ 稲作渡来の時期……弥生式土器時代の西暦紀元前1世紀頃に平坦低湿地で開始
- ④ 朝鮮との関係……朝鮮と日本はほぼ同時期に稲作を開始

[稲作を日本に伝えた民族]

- ・紀元前334年に越が楚の攻撃によって滅亡。越人が大量に日本に渡来して弥生時代の稲作が始まる。その前から呉・越から山東半島への進出があった。
(池橋宏『稲作渡来民』2008、鳥越憲三郎『原弥生人の渡来』1982)

[稲作と弥生時代の開始時期]

- ・炭素14年代法による年代測定(国立歴史民俗博物館)
 - ……BC4世紀と考えられた遺跡は500年遡ると発表(2003年)
 - ＝日本の稲作はBC10世紀に開始 → 「弥生時代はBC10世紀に始まる」と主張
- ・稲作の渡来ルート 長江中下流域(BC1万年)→山東半島(BC25～20世紀)
 - 朝鮮半島(BC15世紀)→ 北九州(BC10～9世紀)
- ・日本各地で稲作が行われるまでには長い時間がかかった
 - 近畿(BC7～6世紀)、東北北部(BC4世紀)、関東(BC2世紀)

5. 日本語の起源と稲・米の語源

「日本語の起源」は「日本人の起源」、「稲作の起源」と関わる問題……未解決

[日本人の起源]

- ①北方から……シベリア、騎馬民族
 - ②朝鮮半島から……渡来人
 - ③中国大陸から……呉・越、徐福
 - ④南島から……黒潮
- ・アイヌ、琉球、縄文人、弥生人、蝦夷と大和政権



[日本語の起源]

- ・日本は**中国の文明から多大の影響**を受けてきた……漢字、儒学、仏教、道教
- ・中国由来の名詞は多くあるが、**中国語は日本語と大きく異なる**(文法、発音、孤立語)
- ・日本語と朝鮮語は、文法は共通であるが基本単語が異なっている
- ・アイヌ語は日本語と大きく異なる(文法、発音、単語)。
- ・琉球語は日本語と同系統の言語であるが、「方言」とは言えない。
→ **日本語はどこから来たのか**、日本人が独自に生み出したものではない

[日本語の特色]

- ・音韻……母音は5音(あいうえお)で少ない。子音の数も少ない。
- ・語順……SOV(主語＋目的語＋動詞)……「私は米を食べる」
形容詞＋名詞(赤い米)、名詞＋助詞(新潟へ、稲の)
- ・膠着語……主体と対象を示す単語がある(「が」「を」)← 孤立語、屈折語
- ・動詞の変化……5段活用(取らない、取ります、取るとき、取れば、取れ)
- ・時制……過去は「た」を付けて示す、未来形がない
- ・冠詞(the, a, la, dir)や関係代名詞(that, who, which)がない

[日本語系統論]

- ①朝鮮語と同系……白鳥庫吉、金沢庄三郎
- ②ウラル・アルタイ語族……藤岡勝二、泉井久之助、村山七郎
- ③南方アジア言語……松本信広、西田竜雄、安田徳太郎(レプチャ語)

[世界の言語系統]

- ・インド・ヨーロッパ語族……ヒンズー語、ギリシャ語、ラテン語、英語、独語、仏語
 - ・ハム・セム語族……ヘブライ語、アラビア語、エジプト語
 - ・ウラル語族……ハンガリー語、フィン語
 - ・アルタイ語族……モンゴル語、トルコ語、キルギス語、カザフ語
 - ・シナ・チベット語族……中国語、チベット語
 - ・オーストロアジア語族……ベトナム語、クメール語
 - ・オーストロネシア語族……タガログ語、インドネシア語、マレー語、アミ語
 - ・ドラヴィダ語族……タミル語、テルグ語、カンナダ語、マラヤーラム語
- 系統が不明の言語……日本語、朝鮮語、バスク語*

[稲作と言語]

・稲作を日本に伝えた民族がいたとしたら、言語も同時に伝えたと考えられ、稲作・米に関する共通の単語があるはず

[安藤広太郎の見解]

サンスクリット語で稲は「Vrihi」(ウリヒー) → 日本語の「ウルチ」

アフガニスタン語 Urishi、シンハラ語 Urhi

中国語……タウ(稲)、ホー(禾)、ミー(米)、カン(穂)

朝鮮語……ト(稲)、ハ(禾)、ミ(米)、ペ(稲) 日本語とは異なる

マレー語……brasブラス(米) → ウルチ

中国江南地方(呉音)……Niwan(稲)……ni の系統

日本語の稲……イネ、イナ、ニ、ヌカ……ニニギノミコト、クシナダヒメ

日本語の「稲」は南方の言語と共通

米(コメ)……沖縄の久米島、「古見」(柳田国男の指摘)

oryza(ラテン語、ギリシャ語)、riso(イタリア語)、riz(フランス語)、rice(英語)

← brizi(古代ペルシャ語)、vrihih(古代インド語)、bras(マレー語)

6. 大野晋の「日本語＝タミル語起源説」と稲作の起源

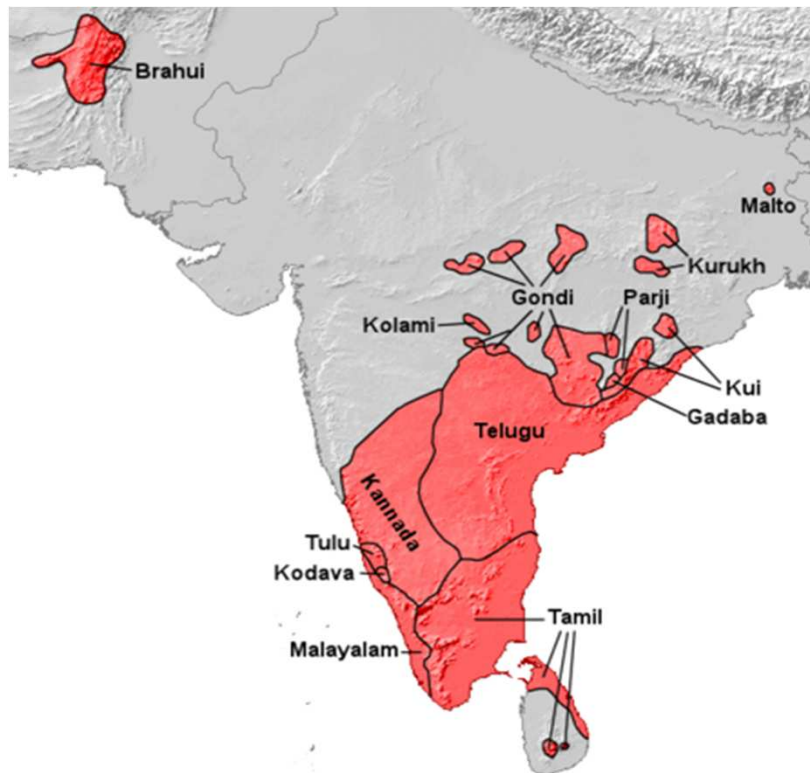
[大野晋](1919－2008)

- ・東京生まれ、43年東京大学国文学科卒、60年より学習院大学教授
- ・『岩波古語辞典』(1974)の編纂(約20年間かかる)……上代20万語を担当
- ・万葉集、日本書紀の校注、「係り結び」の研究(「……こそ……けれ」)
- ・**1957『日本語の起源』**(岩波新書)……日本語系統論(アイヌ語、南方語、朝鮮語、アルタイ語等)に関し考古学、人類学、民族学等の成果も踏まえ検討……結論は出せず
- ・芝罘(1973)、藤原明(1974)、江実がドラヴィダ語と日本語の關係に注目
- ・1974『日本語をさかのぼる』(岩波新書)
- ・1979年にドラヴィダ語の辞書を購入→日本語と対応する単語が多いのに驚く
- ・1980年にマドラス大学を訪問し、コダンダラマン教授に会う
- ・1980『日本語の成立』(タミル語について言及)、1981『日本語とタミル語』出版
- ・1981年 第5回世界タミル学会で「日本語とタミル語の關係」を報告。
- ・1981-82年 マドラスに滞在し、サンガム(タミル古代詩)を研究。
- ・1987『日本語以前』、**1994『日本語の起源 新版』**
- ・1999『日本語練習帳』……ベストセラーに(192万部)
- ・2000『日本語の形成』、2004『弥生文明と南インド』



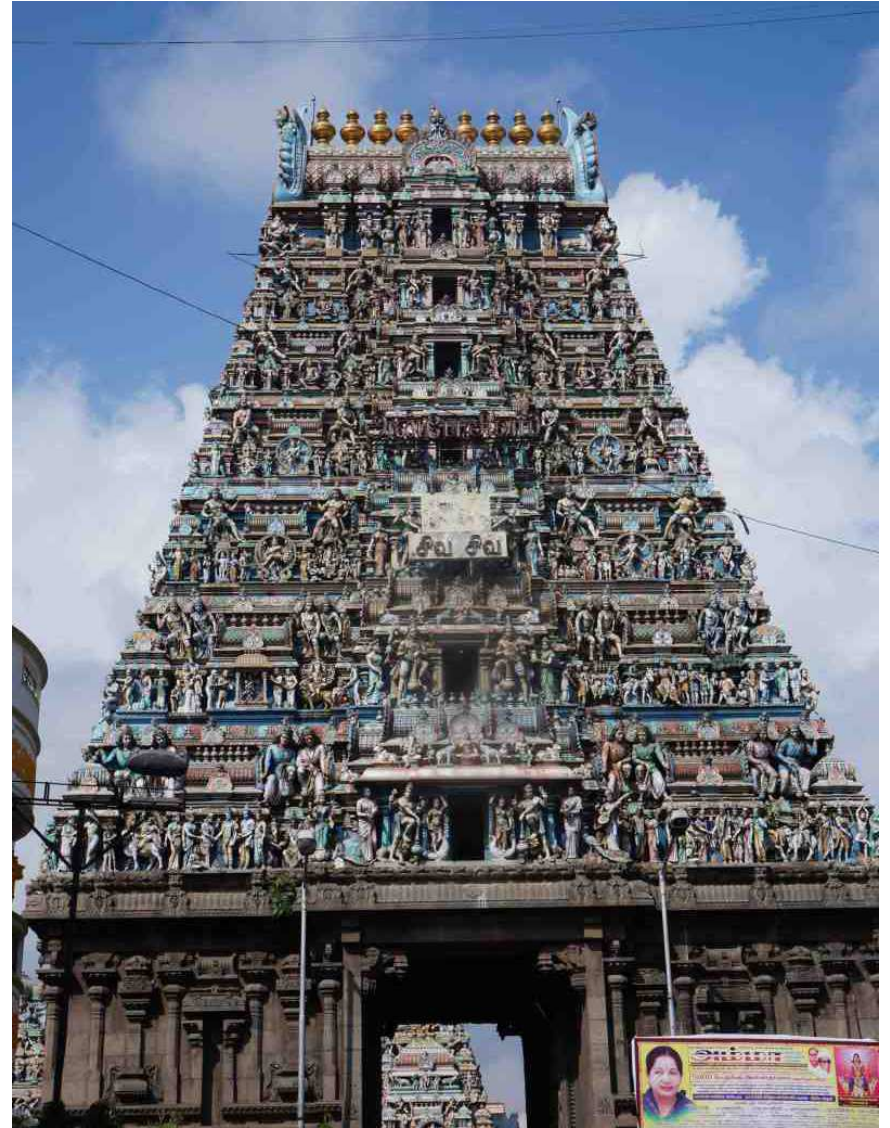
[タミル語とは]

- ・インド南部のタミルナード州(首都チェンナイ)で話されている言語(約5000万人)。
- ・スリランカにもタミル語を話す人がいる(マレーシア、シンガポールにもタミル人がいる)。
- ・ドラヴィダ語族……タミル語、テルグ語、カンナダ語、マラヤーラム語
- ・ヒンディー語とは系統が全く異なる(使っている文字は共通)
- ・「ムトゥ 踊るマハラジャ」(1995)はタミル語の映画



日本語、朝鮮語、タミル語に共通する語彙

	タミル語	日本語	朝鮮語
晶	paṭ-ukar	fat-akē	pat
桑	cit-ai	sit-ōgi	stök
串	kucc-i	kus-i	kot
犁	vēl	fer-a	pyöt
稻	nel	ni	ni



[タミル語と日本語の比較]

- ・音韻に共通性がある
- ・語順が同じ……そのまま日本語になる
- ・共通の単語が多くある……農耕、機織、祭祀
- ・膠着語
- ・助詞の使い方が同じで似ている助詞が多くある
 - ……も(um)、か(kol)、は(vay)、の(in)、や(ya)
- ・サンガムと日本の和歌が同じ「五七五七七」の形式

[稲作・農耕に関する共通の単語]

- ・畔(あぜ)、畝(うね)、田んぼ、泥(しろ)、米(こめ、くま)、稲(いね、しね、に)
- ・糠(ぬか)、餅(もち)、粕(かす)、粢(しとぎ)、畑、粟

[ポンガルと小正月の共通性]……同じ1月15日

- ①トンド焼き、 ②注連縄を張る、 ③門松を立てる ④お粥を食べる
- ⑤カラス勧請、 ⑥神に供え物をする(鏡餅) ⑦三河万歳 ⑧墓参り

[墓制、祭祀]

- ・巨石文化、支石墓、甕棺が共通
 - ・神(かみ)、祭る、祓う(はらう)、崇む(あがむ)、忌み、墓(はか)という単語
- 大野晋『日本人の神』(1997)

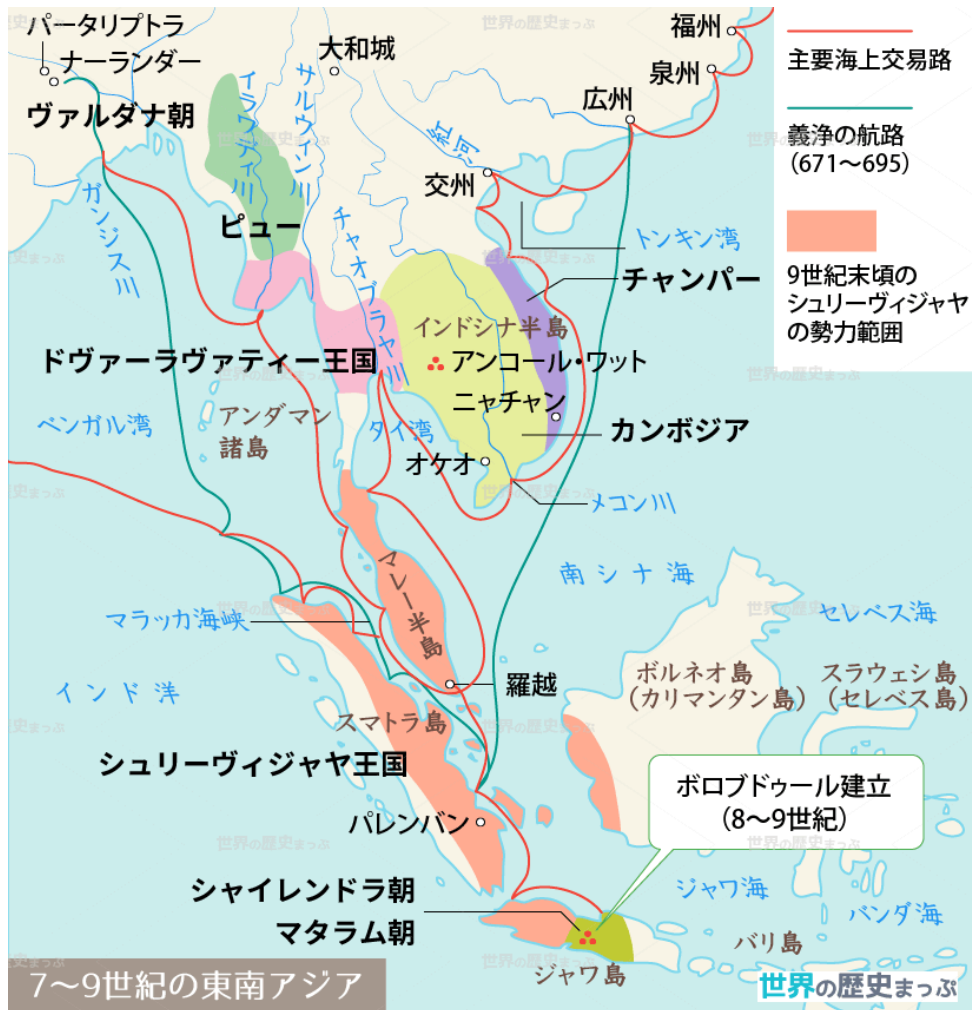
[タミル語が渡来した経路と時期]

- ・海路による渡来……ベンガル湾を横切りマレー半島へ →
ベトナム、台湾を経由して日本へ(北九州と同時に朝鮮半島に伝来)
- ・弥生時代の開始時期(紀元前10世紀)、鉄も南インドから同時期に伝わる

「ドラヴィダ人(タミル人)は、インドシナ半島から遠く南インドへ逃避した倭族として理解したいと思う。」(鳥越憲三郎『原弥生人の渡来』1982)



「インドシナ半島南部から島嶼部にかけて早くから黒人が住みつき、いくつかの王国を築くまでに成長していた。その多くはインドから移動してきたものとみてよかろう。それら黒人が築いた王国として最も有名なのは、現在、その子孫がベトナム南部からカンボジア南部にかけて住むチャム族のものである。彼らは二世紀末に仏教文化の影響を強く受けた**チャンパ王国**を建設した。」(鳥越憲三郎)



7. 赤米、紫黒米について



[赤米・紫黒米とは]

- ・赤米……タンニン系の色素を持つ米
- ・紫黒米……アントシアニン系の色素を持つ米
- ・佐藤敏也『日本の古代米』(1971)、嵐嘉一『日本赤米考』(1974)、
小川正巳・猪谷富雄『赤米の博物誌』(2008)
- ・赤米の起源伝説……高貴な若い女性の血の乳(広東州ヤオ族)、
宋末の将軍が地面を掘って血を注いだ(広東省)(大林太良『稲作の神話』1973)
- ・『稲の日本史』の中に赤米に関する報告(盛永俊太郎、嵐嘉一、浜田秀男)(1953)
- ・稲の野生種は赤米が多い
- ・赤米は悪条件に強い、脱粒性、発芽力が強い → 赤米は干ばつ対策、水害対策
- ・人々は白米を好み、**赤米は排除**されてきた(福嶋紀子『赤米のたどった道』2016)
- ・中世・江戸期の「大唐米」「チャンパ米」の存在。

[赤米と祭]

- ・日本では**赤米を栽培して神社に奉納**しているところがある
(岡山県総社市、長崎県対馬、鹿児島県大隅地方、種子島)

「私の一番の疑問が、中国で一向お祭に使っていないものを、なぜ日本でお祭用にしておるかということです。」(安藤)

「赤米がもとの古い姿であったのでそれを引き継いで神様に供えたとみれないだろうか。」(盛永)

「赤米はことに山地で栽培される。中国人のところでは赤米は劣等米とされているが、この方が栄養に富んでいる。ヤオ族は赤米をすべての点において白米よりも良いと考えている。」(大林太良)

[赤米と赤飯の関係](柳田国男)

「以前の米(赤米)は、まだ食べてみないからわかりませんが、必ずしもまずくなかったかもしれない。……ことによると、信仰行事に使う米だけは赤を選ぶということはあったのかとも思います。」

「私の仮定では、あれは豆が入用なのではない。**赤い色が入用だった**。現在でも、小豆を食べる日をずっと当たってみると、必ずしも祭の日とはいえないけれども、日本では物忌みをして、潔斎に入る日と、ふだんの生活にもどる日の境目を、この赤い食物によって意識させようとしていました。……その時点の重要さを自ら印象づけるために、**小豆又は赤飯の赤色が使われた**とみるよりほかはないのであります。」

[南インドにおける赤米のお粥]

「お粥は赤米で作るんです。……実は私がタミルの問題にこんなに首を突っ込んだ大きな原因は**このお粥にあった**んです。」(大野晋、1989)

「小正月の日に小豆粥を食べるといのは、**中国の揚子江の流域の稲作文化**の中で発達した行事ではないかと考えるわけです。」(大林太良)

「ひょっとすると、このお粥は、稲作よりも古い儀礼に関係する可能性があるかもしれません。……インドネシアのいちばん東の端の島では、アワとハトムギのお粥みみたいなものを作って通過儀礼に食べているのです。」(佐々木高明)

